

教会の暦で、本日よりアドベント（待降節）に入ります。アドベントとはラテン語の「アドベントゥス」から来た言葉です。これは「接近」とか「到来」という意味を持つ名詞です。救い主が来られるという標語です。その救い主のご降誕を待ち望む4週間を本日から過ごすことになるのです。神の御子が救い主としてこの世においでになる出来事は、確かに大いなる喜びのおとずれであります。しかし、この出来事の背後には、手放しで喜べないような困難な事態、神によって起こされた冒険、アドベンチャーが行われていました。救い主の母となったマリアがそうでした。世間の人々から浴びせられる非難や中傷を覚悟のうえで、それでもなお神の約束の言葉の中へと自分を投げ入れていったのです。それはマリアにとって冒険でありました。また、東の国の博士たちも、祖国を離れてイスラエルの王を拝みに出かけました。彼らにとって、それは大いなる冒険であつたに違いありません。クリスマスとは神が人となられた出来事です。しかし、このことは神にとってたやすいことではありませんでした。なぜなら、全能なる神、無限なる神が有限なものになるというのです。死をその身に負う者になるということです。しかも、神が御子を派遣したこの地上の世界は、神の御子にとって決して居心地がよい場所ではありませんでした。にもかかわらず、神はご自身の子イエスをこの世に派遣した。それは神の冒険であります。このことを私たちは厳しく受け止め、それによって起こされた救いを喜びたいのです。

本日お読みいただいたイザヤ書 11 章には「エッサイの株からひとつの芽が萌えいで…」というよく知られた預言の言葉が記されています。このあと賛美歌 153 番を賛美しますが、それはこのイザヤ書 11:1 が記す「エッサイの根より、生い出たる」という歌詞で始まります。この歌は 15 世紀のドイツで生まれた賛美歌ですが、歌詞に旧約聖書の中の人物の名前が出てくる珍しい賛美歌です。153 番はまさに今の時期、待降節の歌です。エッサイとはダビデの父親の名前です。彼はエルサレムの郊外の村であるベツレヘムで羊飼いの仕事をしていました。エッサイには 8 人の息子がいました。ダビデは 8 番目の息子、末の子でした。ただ、エッサイにとって末の息子ダビデは軽い存在でした。サムエル記上を読みますと、神の人であるサムエルがサウル王のあとを継ぐべき王を探し求めていた時、「エッサイの息子の中から王となるべき者をわたしは見出した」という主の言葉を耳にします。そこで、サムエルはエッサイの家を訪問して 7 人の息子たちと対面した。ところが、その 7 人は、皆サムエルの目にかなわなかったのです。サムエルは聞きます「あなたの息子は、これだけですか？」エッサイは答えました。「末の子が残っていますが、今羊の番をしています。」エッサイにとってダビデは、数に入れてなかった息子でした。しかし、そのダビデをサムエルは見出し、そして彼に油を注いだのです。このダビデこそ、サウル王が亡くなった後イスラエルの王となり、近隣諸国との戦いに勝ち、イスラエル王国に最盛期をもたらすこととなります。それは BC1000 年ごろのことでした。息子ソロモンの時代、エルサレムには神殿が建設されます。ソロモンは栄華を極めるのです。エッサイの根とは、ダビデの血筋を引く王家という意味です。

イザヤが登場した時代は、そのダビデ王の時代から 300 年ほど後の時代、BC700 年代の後半のことです。そのころイスラエルは、北と南に分裂し、互いに反目しあっていました。そのような中で、オリエントの大国アッシリアが西南アジア、シリア地方に武力をもって進出してきました。その軍事力により北王国は滅ぼされ、南王国ユダも多額の朝貢、すなわち貢ぎ物のおかげで何とか存立を保てているという状態でした。もっとも、この南王国ユダもそれから 100 年余りのち（BC587 年）に新興国バビロンによって滅ぼされます。そしてバビロン捕囚が起きるのです。こうして、ダビデ王国は 400 年あまりで、南北ともに跡形もなく滅ぼされてしまうのです。エッサイの株とは、切り倒された大木の根株のことです。大木を切り倒した後、大きな切り株が残りますよね。かつて、ソロモン王によって神殿が築かれたころ、大量のレバノン杉が切り倒され、エルサレムに運ばれました。切り倒されたあとのレバノンの林には、多くの切り株が無残に残るだけだったと言います。そのように、エッサイの息子ダビデによって立てられた王国は、イザヤによれば、もはや無残な切り株として残るだけだということです。エッサイの株、つまりダビデ王国は切り倒され、滅んでしまいました。

しかし、このことは、ある意味で神のなせる業であつたといえるのかもしれませんが。なぜなら、士師の時代のあと、イスラエルが王国の時代に入ると、イスラエルはますます不信仰になったからです。列王記上をお読み頂くとわかります。王自らが偶像礼拝を行うようになつた。不正がはびこり、貧しい者、弱い立場の者が虐げられるようになった。ダビデ王の時代にこそ表面化しませんでした。そのあとに続く王たちは、偶像礼拝に走り、利得をむさぼり、正義をおこなわず、悪を行っている、預言者たちは繰り返し訴えています。王国の時代になって、イスラエルはよくなるどころか、かえって悪くなった。だから、切り倒されねばならなかったのです。大国による侵略という方法を用いて、神はこのイスラエル王国、ダビデの血筋を引く王国を打たれました。アッシリア、バビロンという大国によってイスラエル王国が滅ぼされたことは、神の裁きのしるしであり、これによって神はイスラエルの不信仰を断ち切ろうとされました。イスラエルは神によって一度は打たれる必要があつたのです。

しかし、この切り株をよく見てみると、そこに一本の若枝が芽を出しているとイザヤはいうのです。この若枝は「ひこばえ」と呼ばれます。「ひこ」とは「孫」という漢字の訓読みのひとつです。一度は切り倒され、滅ぼされたかと思えるような切り株から、新たに自世代を生きる若枝が芽生えている。その若枝、ひこばえに、未来への希望と可能性が

込められています。「最初の木」は確かに切り倒されました。しかし、それでもなお、イスラエルに対する神の愛が消え去ってしまったわけではありません。神は新たな若枝を芽生えさせ、これを成長させます。これは、最初の木とは異なった仕方で成長し、最初の木と異なる方向に延びてゆかねばなりません。イエス・キリストはそのようなひこばえとして、ダビデの血筋から生まれた新しい指導者として神によって立てられたメシアであるとイザヤは言うのです。

では、このメシアは具体的にどのような人物でしょうか。それが2節以下に記されます。彼は主の霊に満たされた人物です。具体的には、知恵と識別の霊、思慮と勇気の霊、主を知り、恐れ敬う霊であると言われます。前半で4つ、後半で2つの霊が紹介されています。つまり、最初の「主の霊」が、さらに具体的に6つの言葉で説明されています。これらは、世の中で起こる不正に対して正しく物事を判断し、思慮と勇気をもって悪に立ち向かい、主を恐れ敬うような神の霊であります。すなわち、神を恐れることを知っている人物です。今祈禱会では出エジプト記からみ言葉を学んでいます。先週は18章を読みました。モーセのしゅうとであるエトロが、荒野を旅していたモーセのもとに、娘ツイポラと二人の孫を連れてやってきた場面です。モーセは、久しぶりに家族と再会することができた。ところが、翌日になってモーセがイスラエルの民の間に生じた問題を解決するために、列をなして待つ民の一人一人と対面しながら、全員から話を聞いて問題解決をしているという場面を見て、エトロは言います。「なぜ、このようなやり方をするのか。」「このやり方では、民もあなたも疲れてしまうだろう」「小さな問題はほかの人にまかせ、あなたは大きな問題を担当しなさい。」すべてをあなたが背負いこんでは、いくら体があっても足りないだろう、と言ったのです。こうして、モーセの代行をする新たな人、新たな民の指導者が選ばれました。その指導者の一番目の条件が「神を恐れる人」でした。「神を恐れる」とは「びくびくして怖がる」ということではありません。そうではなく「神を神として畏れ敬う」ということです。畏敬するということです。指導者に必要な資質の第一はそれだと、聖書はいうのです。私は、今世界の各地で起きている紛争の一番の原因は、戦いを仕掛けている国家の指導者が、本当の意味で神を恐れる人になっていないということだと思います。もしかしたら、自分が神さまだと思っているかもしれないと思うほどです。しかし、イザヤがとくメシアはそうではありません。彼は、目に見えること、耳にすることだけを信じ、うわべのことだけで物事を判断し、裁きをするようなことはないというのです。

続く4節にはこう記されます「弱い人のために正当な裁きを行い、この地の貧しいを公平に弁護する」裁判は、もともと公平におこなわれ、それによって正義が実現されねばなりません。法とは正義の概念にもとづいて定められたルールです。ところが、イザヤの時代、しばしば強い者やお金持ちが党派を組んで、あるいは財力に任せて証言者を買収し、ウソの証言をさせて有利な判決を勝ち取るという例がありました。裁判で苦しむのは、いつも社会的に弱い立場の者、貧しい者だった。しかし、真のメシアはそのような弱者のためにこそ正当な裁判を行い、公平に弁護する者であるとイザヤはいうのです。

イザヤは、同じ9章でこのようなメシアが「平和の君」と唱えられると書いています。平和はもともと神の支配のもとで実現するものであり、人が神と和解し、また隣人とも和解することによって実現するものであります。つまり、平和は神の国が来ることと、シンクロナイズしているのです。本日お読みいただきませんでした。6節以下で、来たりたもうメシアは、人間世界だけでなく自然世界にも平和をもたらすお方であることが記されています。「狼は小羊と共に宿り、豹は子山羊と共に伏す。子牛は若獅子と共に育ち、小さい子供がそれらを導く」肉食動物が草食動物と一緒にあって、草を食べながら成長するというその世界は、まさに争いのない世界、ユートピア（理想郷）のような世界です。しかし、聖書は神の支配が貫徹する創造の初めの世界において、そもそも人間同士、動物同士は敵対する関係ではなかったことを説いています。人間の罪、人間が神のようになって名を高くしたい、多くを所有し、支配したいと願うその欲望が、この世における争いや対立を生み出したと聖書は考えるのです。

このようなメシアは、地上の世界にはいまだ現れていません。しかし、このような王が全世界の支配者としておいでになるとイザヤは預言します。「わたしの聖なる山においては、何者も害を加えず、滅ぼすこともない。水が海を覆っているように、大地は主を知る知識で満たされる」（9節）「その日が来れば、エッサイの根はすべての人の旗印として建てられる」とイザヤは言う。旗印とは、戦いにおける敵、味方を示す目印のことです。主が来られるとき、すべての民がこのキリストの御旗のもとに集まってくるというのです。クリスマスの出来事は、その意味においてまことの救い主が来られる日が、今そこに来ていることを告げ知らせる喜びの出来事です。

お祈りいたします。